

2026年合格目標 TAC・Wセミナー公務員講座

外務専門職 経済学①

（基本マスターテキスト経済学）

体験入学用テキスト

【 ご 案 内 】

当教材は、体験入学用の抜粋版となっており、該当範囲を抜粋したものとなっております。

基本マスター講義・経済学

＜講義進度表＞

回数	学習項目	本書 対応ページ
1	第Ⅰ部 序章～第1章 第3節	P6～22
2	第Ⅰ部 第1章 第3節～第2章 第1節	P22～36
3	第Ⅰ部 第2章 第2節, 第3節	P37～46
4	第Ⅰ部 第3章 第1節, 第2節	P47～58
5	第Ⅰ部 第4章 第1節～第5章 第2節	P59～70
6	第Ⅰ部 第5章 第3節～第6章 第3節	P71～84
7	第Ⅰ部 第7章 第1節～第8章 第3節	P85～104
8	第Ⅱ部 第1章 第1節～第2章 第2節	P113～120
9	第Ⅱ部 第2章 第3節～第2章 第5節	P121～139
10	第Ⅱ部 第2章 第5節～第3章 第3節	P140～149
11	第Ⅱ部 第3章 第3節～第4章 第4節	P149～160
12	第Ⅱ部 第4章 第5節, 第6章 第1節～第4節	P161～163 P186～196
13	第Ⅱ部 第6章 第5節～第7章 第2節	P197～209
14	第Ⅰ部 第9章 第1節, 第2節 第Ⅱ部 第5章 第1節～第3節	P105～109 P164～171
15	第Ⅱ部 第5章 第4節～第5章 第6節	P172～185

必ず「オリエンテーション」を受講してから、講義を受講してください。

目 次

＜序章＞ 経済学の論理と方法	6
第 I 部 ミクロ経済学	
＜第 1 章＞ 消費者行動理論	13
第 1 節 効用関数と無差別曲線	13
第 2 節 効用最大化	17
第 3 節 所得・価格の変化と最適消費計画の変化（比較静学）	19
第 4 節 消費者行動理論（2 財モデル）の応用	27
＜第 2 章＞ 生産者行動理論	33
第 1 節 生産関数と等量曲線	33
第 2 節 利潤最大化と費用最小化	37
第 3 節 費用関数と利潤最大化	39
＜第 3 章＞ 完全競争市場の部分均衡分析	47
第 1 節 完全競争市場の部分均衡モデル	47
第 2 節 価格弾力性と需要・供給の変化	54
＜第 4 章＞ 完全競争市場の一般均衡分析	59
第 1 節 純粋交換経済・消費の効率性	59
第 2 節 市場(価格)機構	61
＜第 5 章＞ 市場の失敗	64
第 1 節 市場の失敗の原因	64
第 2 節 外部効果	64
第 3 節 公共財	71
＜第 6 章＞ 不完全競争市場 1	74
第 1 節 独占	74
第 2 節 価格差別	79
第 3 節 自然独占・費用逓減産業	81

＜第7章＞	不完全競争市場 2	85
第1節	複占・寡占	85
第2節	寡占市場における価格の硬直性	90
第3節	独占的競争	93
＜第8章＞	ゲーム理論	97
第1節	ゲームと戦略	97
第2節	標準型ゲームとナッシュ均衡	97
第3節	展開型ゲームと部分ゲーム完全均衡	102
＜第9章＞	国際ミクロ経済学	105
第1節	貿易の利益	105
第2節	貿易政策(保護貿易政策)	106

第Ⅱ部 マクロ経済学

＜第1章＞ 国民経済計算	113
第1節 国民経済計算体系	113
第2節 国民所得統計	114
第3節 名目GDPと実質GDP	118
＜第2章＞ 財市場の分析	119
第1節 有効需要の原理	119
第2節 消費関数と貯蓄関数	119
第3節 財市場の均衡と国民所得の決定—45度線モデル—	121
第4節 政府部門の導入	126
第5節 外国部門の導入	133
＜第3章＞ 資産市場の分析	141
第1節 資産	141
第2節 資産市場の分析	145
第3節 貨幣市場の分析	145
＜第4章＞ IS/LM分析	151
第1節 IS曲線	151
第2節 LM曲線	154
第3節 財市場および貨幣(資産)市場の同時分析	157
第4節 財政政策の効果	158
第5節 金融政策の効果	161
＜第5章＞ 国際マクロ経済学	164
第1節 国際収支統計	164
第2節 為替レートと国際通貨制度	166
第3節 為替レート決定理論	168
第4節 経常収支と為替レートの関係	172
第5節 経常収支の決定	175
第6節 IS-LM-BP分析(基礎)	178

＜第6章＞	総需要・総供給分析	186
第1節	総需要曲線	186
第2節	労働市場	188
第3節	総供給曲線	191
第4節	AD-AS (総需要・総供給) 均衡	196
第5節	総需要管理政策の効果	197
第6節	総供給の変化	199
第7節	ケインズ派と古典派	200
＜第7章＞	失業とインフレーション・デフレーション	204
第1節	失業・失業率	204
第2節	インフレーション・デフレーション	206

<序章> 経済学の論理と方法

1. 身近な経済活動と市場経済

- ・ コンビニエンスストアでおにぎりを買って食べる。
=財
- ・ TAC・W セミナーに来るために電車に乗る。
=(輸送)サービス

消費

- ・ マクドナルドでアルバイトをして、ハンバーガーを作る。
=生産者・企業 =労働供給 =財
- ・ 家庭教師をして、中学生に英語を教える。
=生産者・企業 or 労働供給 =(教育)サービス

生産

* (広義の)財=経済活動で取引の対象となるもの。

- ・ (狭義の)財=物理的な財。
- ・ サービス=非物理的な財。

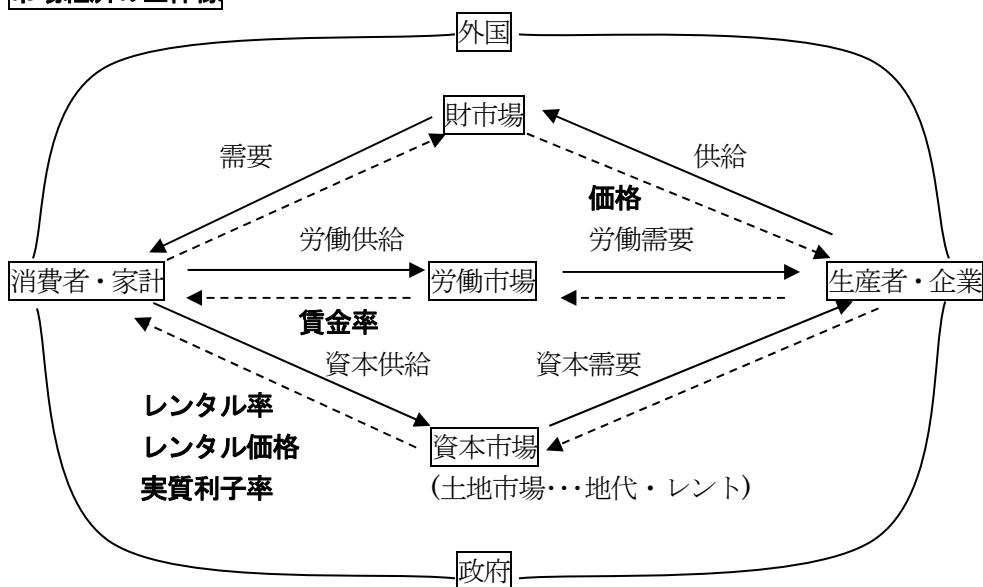
※経済学では(狭義の)財とサービスを明確に区別しない。

→経済活動は**市場経済**の中で行われる。

・ **市場**=財・サービスの取引がなされる具体的な場所または抽象的な場所。

※市場は無数に存在する。

市場経済の全体像



2. 稀少性と選択

- ・稀少＝財・サービスが人間の欲望を満たすほどに存在しない状態。

※絶対量が少ないという意味ではない。

┌ 経済財＝稀少性がある財・サービス。 ex)時間
└ 自由財＝稀少性がない財・サービス。 ex)空気

- ・資源(生産要素)

＝人間の欲望を満たす財・サービスを生産するための投入物のこと。

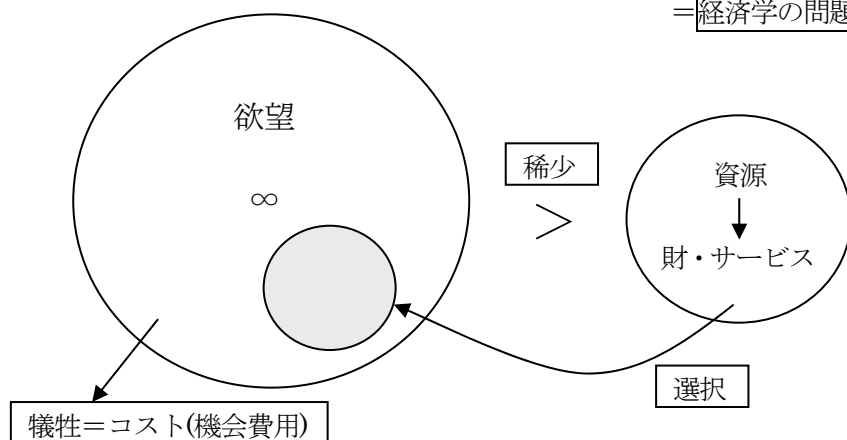
┌ 本源的生産要素＝労働，土地，自然資源(原油，鉱物，天然ガス etc.)

└ 資本＝過去の生産の結果として存在する建物や機械(資本財)。
＝生産活動のための資金(おカネ)。

「欲望は無限大 $\longleftrightarrow$ 資源は限られている」

→競合する複数の対象から何に資源を振りわけるか・・・**選択**の問題

＝**経済学の問題**



3. 経済学の定義

- ・経済学

＝稀少な財・資源を競合する目的のために選択・配分する方法を研究する学問。

┌ **ミクロ(微視的)経済学**

＝個別的な消費者(家計)や生産者(企業)の行動の分析，
ある財・サービスの「市場」の分析，「政府の役割」の考察を行う経済学。

└ **マクロ(巨視的)経済学**

＝一国の経済全体を，1つの経済システムとして捉え，集計的な変数を用いて
経済の運行法則を分析する経済学。

4. 経済学の基本問題

何をどれだけ
どのような方法で
誰のためにどれだけ 生産するか

{「何をどれだけ」「どのような方法で」…資源配分(allocation)の問題
{「誰のためにどれだけ」…所得分配(distribution)の問題

→これらは市場(価格)機構を通じて決定する。

経済学ではこのメカニズムを
分析する(特にミクロ分野)

5. 経済主体の合理性

・経済主体の合理性

＝目的が与えられたとき、経済主体はその目的達成に「最適な行動」をとると
いう性質。＝無駄がない、効率的

- ・目的＝“何かを最大化すること”と仮定する。

{消費者→自己の満足(効用)
{生産者→自己の利潤

6. 実証的分析と規範的分析

- ・実証的分析＝価値観を含まない純粋に論理的な分析。

(客観的) →「現実はどうなっているか、論理的にどうなるか」を分析する。

- ・規範的分析＝ある価値観を含みどう問題が解決されるべきかを分析。

(主観的) →「どうあるべきか」を分析する。

7. 部分均衡分析と一般均衡分析

- ・部分均衡分析＝1つの市場のみを分析する方法。

→単純だが曖昧な分析。

- ・一般均衡分析＝複数(2つ)の市場を同時に分析する方法。

→複雑だが厳密な分析。

8. 効率性の問題と公正の問題

- ・資源配分の効率性の問題…実証的問題

ex) 限りある資源(原材料)からどのようにして最大のピザを作るか。

- ・所得分配の公正さの問題…規範的問題

ex) 最大のピザをどのようにして分けるか。

9. 経済学の方法

・モデル分析

＝経済活動のモデル(＝模型)を作り、それを使って経済を分析する。

- 〔外生変数＝モデルの外で決まる変数(所与の変数)。
- 〔内生変数＝モデルの中で決まる変数。
- 〔比較静学＝外生変数の変化に対する内生変数の変化の分析。

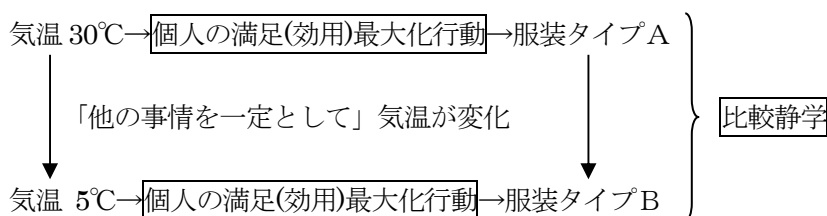
ex) 個人が服装を決定するモデル

- ・ 仮定 ；個人は「自己の満足(効用)が最大」になる服装を決定する
- ・ 制約条件；個人が選べる服装のタイプはA～Eの5タイプ

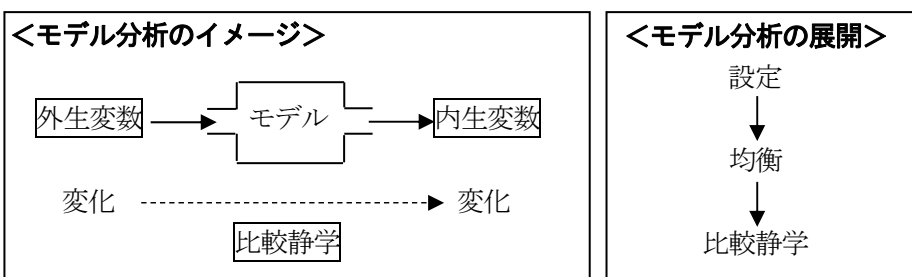
外生変数…気温

(気温以外の服装に影響を与える要因は無視＝「他の事情は一定とする」)

内生変数…服装のタイプ



→このモデル分析により、「気温」と「個人の服装のタイプ」と関係がわかる。

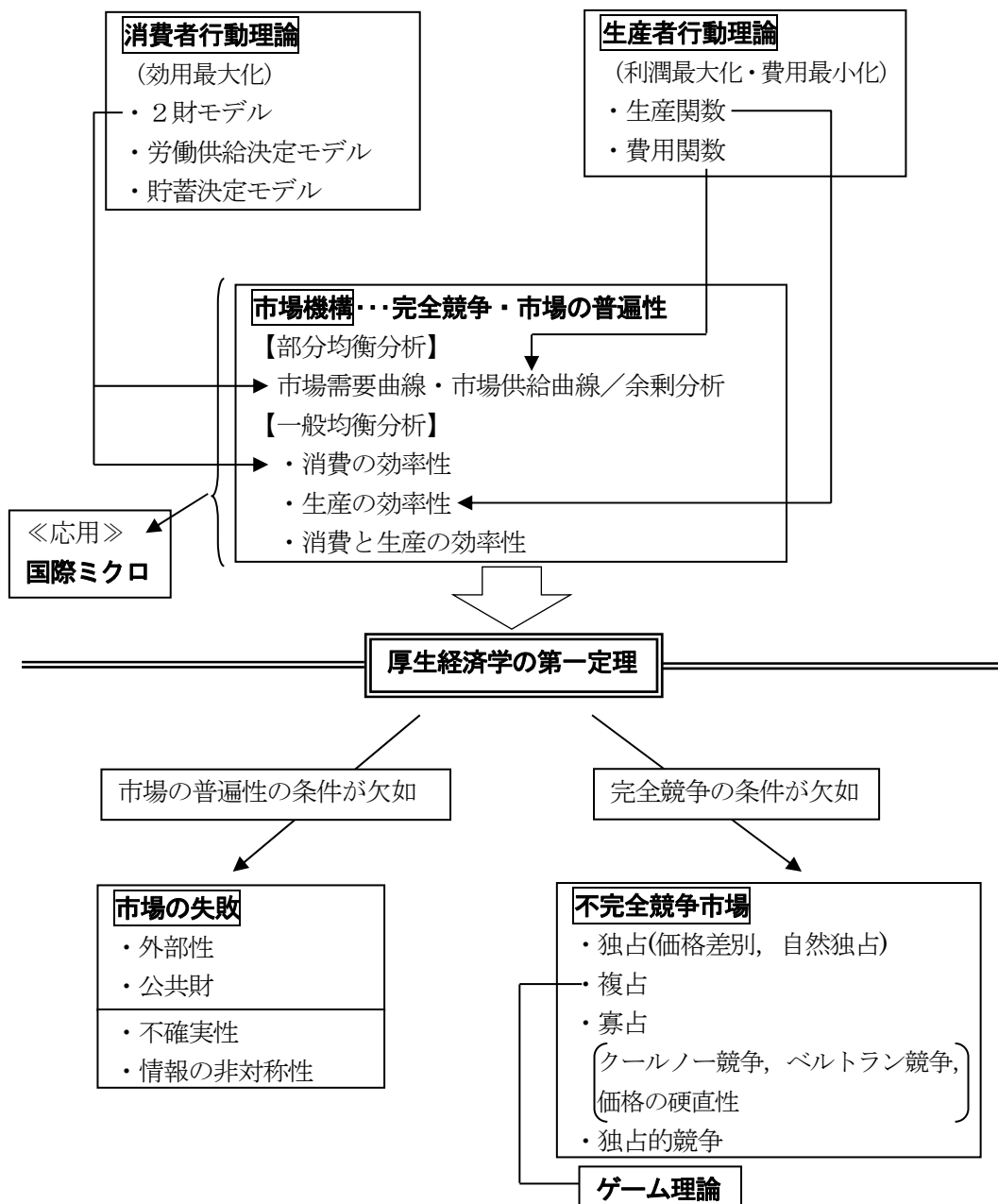


→モデル分析の考え方・センスを身に付けることが経済学の勉強。

第 I 部

ミクロ経済学

＜ミクロ経済学の全体像＞



<第1章> 消費者行動理論

消費者(家計)の行動

＝消費者は、「財の価格」と「所得」を所与として、「予算制約」の下で、「自己の効用を最大化する」ために、「財の消費量の組合せ」を決定する。

これをモデル化する

・ **プライス・テイカー(価格受容者)**＝価格を所与として行動する経済主体のこと。

第1節 効用関数と無差別曲線

1. 効用関数

※関数(function)＝数と数と関係を示すもの

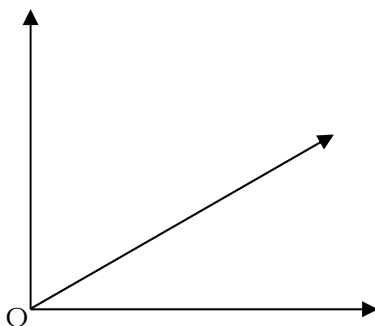
- ・ **効用**(utility : U)＝消費者の満足の度合い。
- ・ **効用関数**＝財の消費量の組合せと効用の大きさの関係を示す規則。

図示

$$U = U(x_1, x_2) \quad < \text{式 1-1} >$$

(U : 効用, x_1 : 第1財の消費量, x_2 : 第2財の消費量)

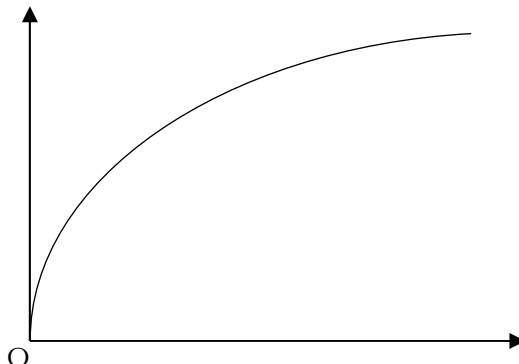
・ **効用曲面**



<図 1-1>

(一方の財(第2財)の消費量にある水準に固定して垂直に切断する)

・ **効用曲線**＝ある財(第1財)の消費量と効用の大きさの関係を示す曲線。



<図 1-2>

△(デルタ)・・・変化分を示す。
→ $\Delta U = U$ の変化分

・ **限界効用** (marginal utility : MU)

＝他の財の消費量を一定として、ある財の消費量を追加的に1単位変化させたときの効用の変化分。

→効用曲線上のある点における接線の傾きで示される。

※「限界」はグラフ上では「接線の傾き」で示され、数学上は「微分」を意味する。

・ **限界効用逓減の法則**

＝財の消費量を増加させるにつれて限界効用は低下していくという一般的な仮定。

※限界効用は低下していくが、ゼロ以下になることはない(常に正の値)と仮定する＝消費者の選好(preference)に関する不飽和(単調性)の仮定

→効用曲線は「常に右上がり」で「上に凸型」あり、水平や右下がりになることはない。

2. 無差別曲線

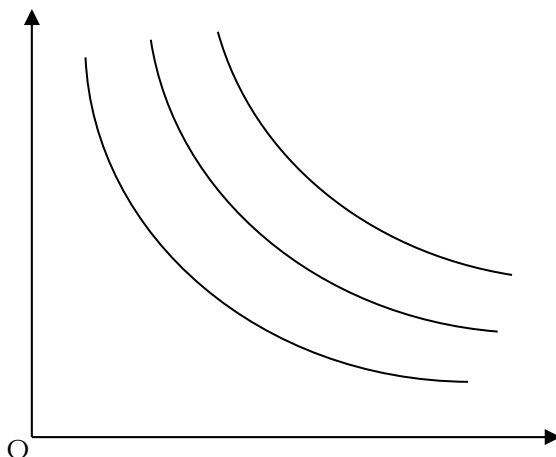
(1) 定義

・ **無差別曲線** (indifferent curve)

＝同じ効用をもたらす財の量の組合せの集合。

＝効用に差が無い＝無差別

→無差別曲線は効用曲面の「等高線」として示される。



<図1-3>

(2) 性質

①「無数に描ける」←完全性(完備性)の仮定

＝あらゆる財の消費量の組合せが可能で、それぞれの間で効用の大小が比較できること。

②「右下がり」←不飽和の仮定

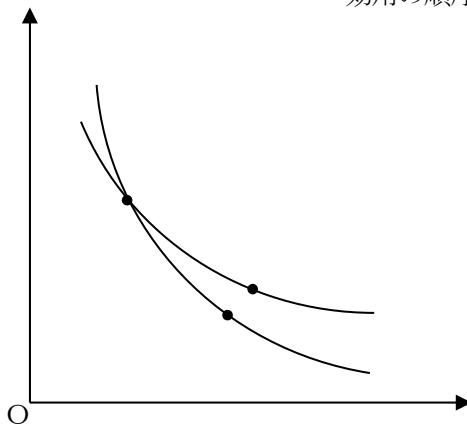
理由

- ・第2財の消費量が一定の下で第1財の消費量が増加すると、不飽和の仮定により効用が必ず増加する(<図1-3>点A→点C)。
- ・効用を一定に保つ(＝効用を無差別にする)ためには、第2財の消費量が減少する必要がある(<図1-3>点C→点A)。

③「右上にある(原点から遠い)ものほど高い効用水準に対応」←不飽和の仮定

④「互いに交わらない」←推移性の仮定＋不飽和の仮定

＝効用の順序付けに矛盾がないこと。



<図1-4>

証明；背理法

仮定「無差別曲線は互いに交わる」

効用の比較

$$A = C$$

$$C = B$$

$$\Rightarrow A = B$$

しかし、性質③により、 $A < B$

→互いに交わると矛盾が生じる。

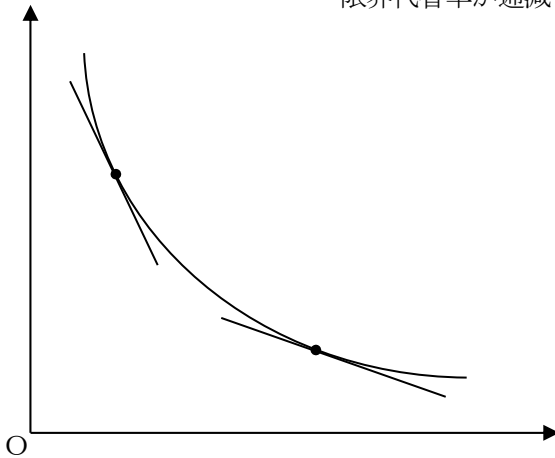
∴互いに交わらない。

※背理法

＝命題「Aである(Aではない)」を証明するために、その逆「Aではない(Aである)」を仮定し、その仮定の下では論理的矛盾が生じることをもって、元の命題を証明する方法。

⑤「原点に対して凸型」←限界代替率の逓減性の仮定

＝限界代替率が逓減すること。



<図 1－5>

・限界代替率(marginal rate of substitution : MRS)

＝ある財(第1財)の消費量を追加的に1単位変化させたときに、効用を一定に維持するために変化させるべき他の財(第2財)の消費量。

＝第2財で測った第1財の主観的価値(主観的交換比率)。(※)

→無差別曲線上のある点における接線の傾きの絶対値で示される。

・限界代替率逓減の法則

＝同一の無差別曲線上において、一方の財の量が増加するにつれて限界代替率は低下していくという一般的な仮定(→無差別曲線の性質⑤)

・限界効用と限界代替率の関係

$$MRS = \frac{MU_1}{MU_2} \quad < \text{式 1－2} >$$

＝無差別曲線上のある点における限界代替率は、その点における第1財の限界効用と第2財の限界効用の比に等しい。

※「限界代替率＝主観的価値」の意味

当初、チョコ3単位・アメ10単位の状態であるとする。

→ここで、チョコを追加的に1単位もらえる場合、

アメは何単位犠牲にしてもよいと考えるか？

ex) 犠牲にしてもよいアメが3単位ならば、チョコ1単位＝アメ3単位

MRS=3

第2節 効用最大化

1. 予算制約

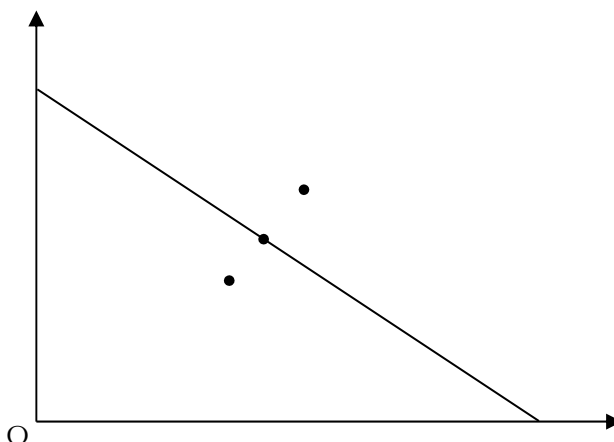
(1) 予算制約式

$$p_1 x_1 + p_2 x_2 = I \quad \text{＜式 1－3＞}$$

(p_1 : 第1財の価格, p_2 : 第2財の価格, I : 所得)

(2) 予算制約線

＝所与の財の価格と所得の下で、所得(予算)を使い切った場合の第1財の消費量と第2財の消費量の組合せの集合。



＜図 1－6＞

予算制約線の特徴

- 傾きの大きさの絶対値・・・財の価格比, 相対価格
- 横軸切片・・・所得(予算)すべてを第1財の消費に充てたときの第1財の消費量。
- 縦軸切片・・・所得(予算)すべてを第2財の消費に充てたときの第2財の消費量。

財の量の組合せ

- ・点A(予算制約線より右上の領域)・・・予算オーバー。
- ・点B(予算制約線上の点)・・・予算内, 予算を使い切っている。
- ・点C(予算制約線より左下の領域)・・・予算内, 予算を使い切っていない。

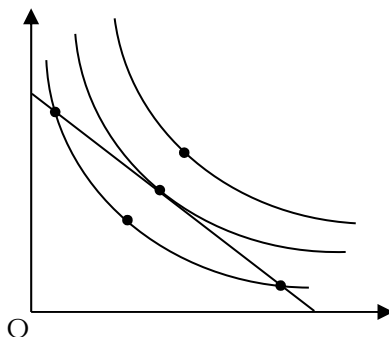
⇒**購買可能集合**・・・予算制約線と各軸で囲まれた領域。

＝所与の財の価格と所得の下で選択可能な財の量の組合せの集合。

2. 最適消費計画の決定

・最適消費計画（効用最大化点）

＝予算制約を満たし、かつ、効用を最大化する財の量の組合せ。



<図 1-7>

◎最適消費計画＝点E(x_1^* , x_2^*): 予算制約線と無差別曲線の接点

- 点A・・・予算を使い切っていない。
→不飽和の仮定により、余っている所得(予算)を財の消費に充てれば効用をさらに大きくできる(＝効用最大ではない)。
- 点D・・・予算オーバー ⇒ 選択不可能(予算制約を満たしていない)
- 点B,点C・・・予算を使い切っているが、点Eより原点に近い無差別曲線上に位置する。
→予算制約の下で効用最大ではない。

$\left\{ \begin{array}{l} \text{予算制約線の傾きの絶対値} = \text{財の価格比}(p_1/p_2) \\ // \\ \text{点Eにおける無差別曲線の接線の傾きの絶対値} = \text{MRS} \end{array} \right.$

$$\Rightarrow \text{MRS} = \frac{p_1}{p_2} \quad \text{<式 1-4 : 効用最大化条件 1>}$$

$$\Rightarrow \frac{\text{MU}_1}{p_1} = \frac{\text{MU}_2}{p_2} \quad \text{<式 1-5 : 効用最大化条件 2>}$$

＝加重(貨幣 1 単位あたりの)限界効用均等化の法則

まとめ 2財モデル

- $\left\{ \begin{array}{l} \text{Max. : } U = U(x_1, x_2) \\ \text{s. t. : } p_1 x_1 + p_2 x_2 = I \\ \text{given : } p_1, p_2, I \end{array} \right. \Rightarrow (x_1^*, x_2^*)$
- ※Max. = 「～を最大化する」
- ※s. t. = subject to・・・「～を条件として、～に服従して」
- ※given = 「～を所与として」

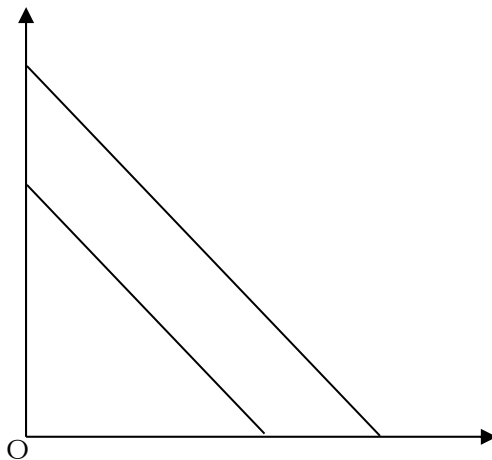
第3節 所得・価格の変化と最適消費計画の変化（比較静学）

1. 所得の変化と効用最大化

(1) 予算制約の変化

・財の価格 p_1, p_2 一定の下で，所得 I のみ変化

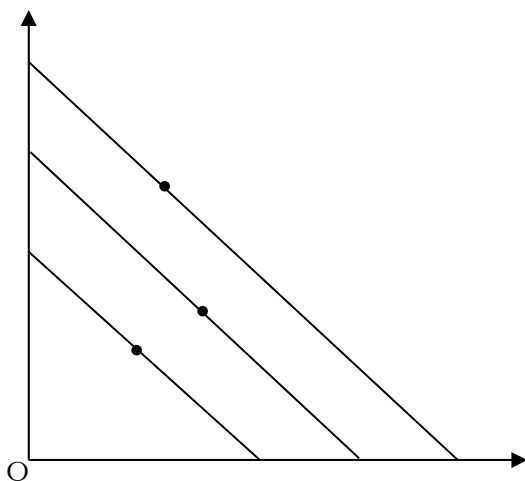
⇒所得が増加(減少)すると，予算制約線は右上(左下)に平行シフトする。



<図 1-8>

(2) 所得消費曲線

＝所得が変化したときの最適消費計画の変化の軌跡。

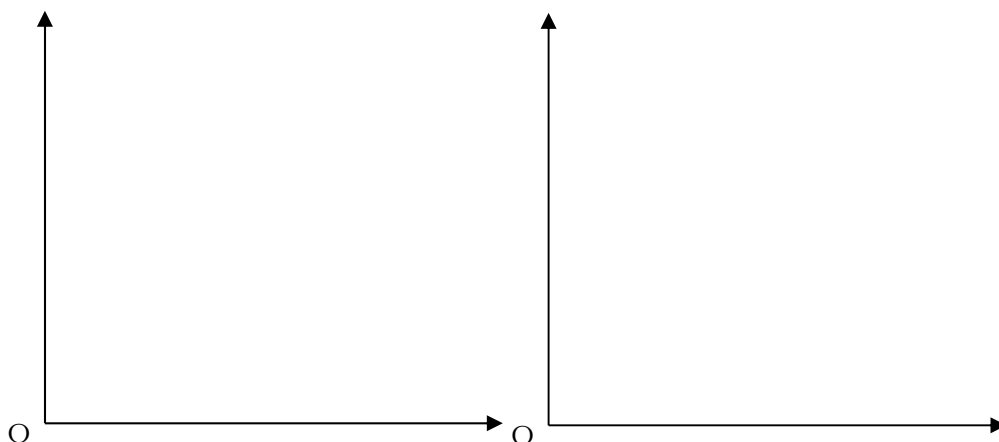


所得 : $I_0 < I_1 < I_2$
予算制約線 : $\ell_0 \rightarrow \ell_1 \rightarrow \ell_2$
最適消費計画 : $E_0 \rightarrow E_1 \rightarrow E_2$

<図 1-9>

(3) エンゲル曲線

＝所与の所得に対して財の需要量を対応させる規則(**エンゲル関数**)を示す曲線。



<図 1-10-a ; 第1財>

<図 1-10-b ; 第2財>

※<図 1-9>に対応して作図

・ **需要の所得弾力性 e_I** (弾力性 ; elasticity = “反応度合い” を示すもの)

＝所得 I が 1 % 変化したときに財の需要量 x が何 % 変化するかを表すもの。

$$\text{需要の所得弾力性 } e_I = \frac{\frac{\Delta x}{x}}{\frac{\Delta I}{I}} = \frac{\Delta x}{\Delta I} \times \frac{I}{x} \quad \text{<式 1-6>}$$

(4) 財の分類

① **上級財 (正常財)** … エンゲル曲線は右上がり

$$\boxed{\text{所得} \uparrow \downarrow \Rightarrow \text{需要量} \uparrow \downarrow} \cdots e_I > 0 \quad \begin{cases} e_I > 1 \cdots \text{奢侈品} \\ e_I < 1 \cdots \text{必需品} \end{cases}$$

② **中立財 (中級財)** … エンゲル曲線は垂直

$$\boxed{\text{所得} \uparrow \downarrow \Rightarrow \text{需要量} \text{不変}} \cdots e_I = 0$$

③ **下級財 (劣等財)** … エンゲル曲線は右下がり

$$\boxed{\text{所得} \uparrow \downarrow \Rightarrow \text{需要量} \downarrow \uparrow} \cdots e_I < 0$$

※中立財と下級財は必ず必需品になる。

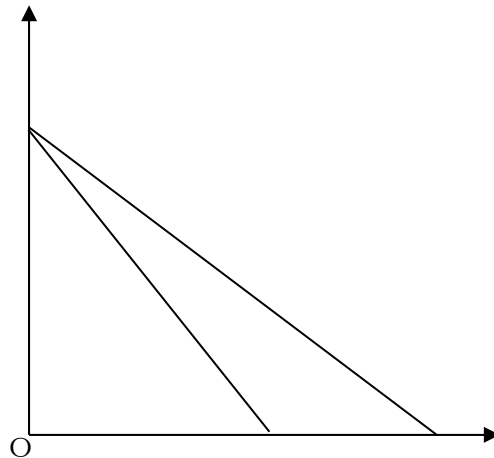
※上級財・中立財・下級財は、財の性質を表す概念ではない。また、無差別曲線の形状(＝消費者の選好)によって決まる。

※2財モデルでは、2財のうち、必ず一つは上級財になる。

2. 価格の変化と効用最大化

(1) 予算制約の変化

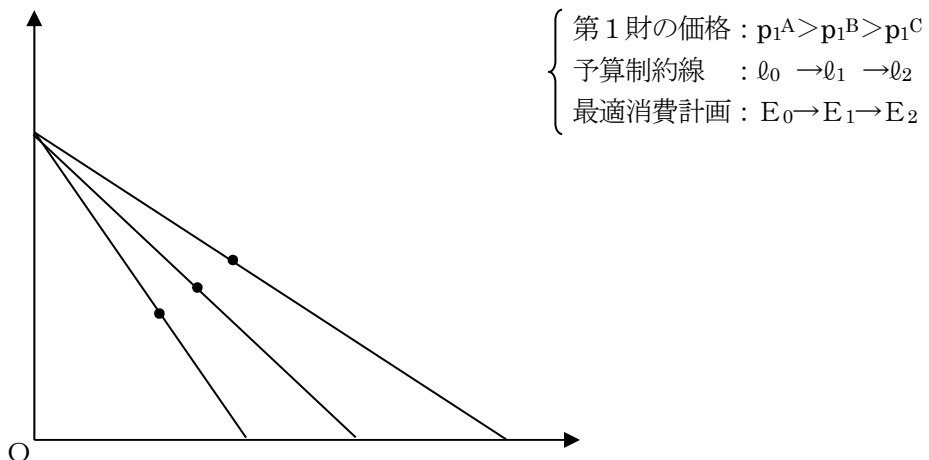
- 第2財の価格 p_2 および所得 I 一定の下で、第1財の価格 p_1 のみ変化
 $\Rightarrow$ 第1財の価格が低下(上昇)すると、予算制約線は縦軸切片を一定として反時計回り(時計回り)にシフトする。



<図 1-11>

(2) 価格消費曲線

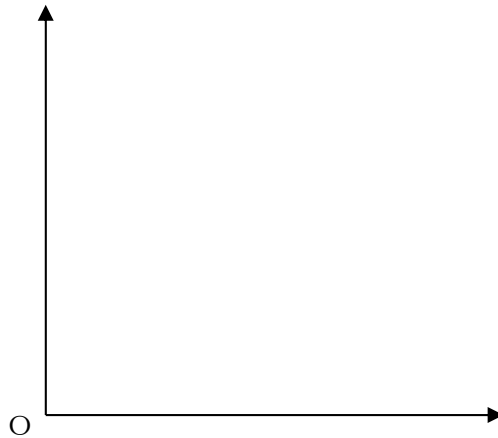
= 価格が変化したときの最適消費計画の変化の軌跡。



<図 1-12>

(3) 個別需要曲線

= 所与の財 X の価格に対してある個人の財 X の需要量を対応させる規則(**個別需要関数**)を示す曲線。



<図 1-13> ※<図 1-12>に対応して作図

(4) スルツキー分解

= 財の価格の変化によって生じる最適消費計画の変化を、代替効果と所得効果に分けること。

ある財の価格の変化は 2 つの変化をもたらす

①ある財の価格の変化は財の相対価格(価格比)を変化させる。

	昨日	今日
コーヒー 1 杯	500 円	500 円
紅茶 1 杯	500 円	100 円
	↓	↓
	$\text{コ} 1 = \text{紅} 1$	$\text{コ} 1 = \text{紅} 5$ …… コーヒーが相対的に高くなった。
		$\text{紅} 1 = \text{コ} 1/5$ …… 紅茶が相対的に安くなった。
	※ $\text{コ} 1 = \text{紅} 1$ …… 「コーヒー(紅茶) 1 杯を選択すると紅茶(コーヒー) 1 杯が犠牲になる。」	

②ある財の価格の変化は実質所得 (= 買うことのできる量)を変化させる。

名目所得 I

昨日 …… 1000 円 = コーヒー 1 杯 + 紅茶 1 杯

今日 …… 1000 円 = コーヒー 1 杯 + 紅茶 5 杯 …… 実質的に所得が増加した。

→ 「財の価格の低下(上昇) ⇒ 実質所得の増加(減少)」



無断複製・無断転載等を禁じます。